

S 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてH Bの黒鉛筆またはH Bの黒のシャープペンシルで記入することになっています。H Bの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにH Bの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	○	○	●	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解信用紙に書くこと)

彫刻の起源は、おそらく絵画よりもはるかに遡ったところ、ボードレルの言葉(注1)を借りて言えば「有史以前の暗黒の中」にあるだろう。そのボードレルは、「一八四六年のサロン」のなかで、「彫刻はなぜ退屈であるか」という一節をわざわざ設けて、彫刻の悪口を書いている。この悪口は痛烈なものである。

絵画は「推論の芸術」であって、これをキョウジュ(注2)するには一種の手ほどき(注3)が要る。石や木でこしらえた何かの模造物を撫で回したり崇拜したりするのに推論は要らぬ。だから、精神において最も素朴でグドン(注4)な者たちも嬉々としてそれを行ってきた。が、絵画の前ではそうはいかない。指で触れえぬものの神秘が、絵画というものには常にある。彫刻はむき出しの物体そのもので、どこにも不明瞭な点はないように思える。けれども、それを一体どの位置、どの角度から視ればよいのかわからない。作り手が、ひとつの視点に固執したところで無駄なことである。視る側は、ぐるぐる回って無数の位置から視る。ふとした光線のいたずらが、時としてそれを素晴らしいものに見せるが、そういう偶然ほど芸術家にとって不名誉なものはない。そう考えれば、絵画の専横や排他性こそ芸術の強度を具現するものではないか。

要するに、彫刻が視覚対象、あるいは感覚対象となることの弱さ、曖昧さに対して、ボードレルは我慢がならないであろう。この弱点によって、彫刻は建築の装飾物や日常の玩弄品(注5)となつてしまい、芸術作品の厳密さを持ちえない。ロダン(注6)という人は、彫刻へのボードレルのこの罵倒に、まさに応えるべくして生まれてきた人物のように見える。彼は、彫刻が厳密な視覚対象となるために必要なあらゆる革新を彫刻のなかに持ち込んだ。リルケの『オーギュスト・ロダン』は、そのことを実に精細に書き込んでいる。

リルケによれば、ロダンが仕事を始めた時、彫刻はいかにも孤独であった。装飾すべき建造物を失い、庭を失い、近代絵画が確保しつつあった中産階級の居間の壁面さえ与えられることはなかった。彫刻は、それだけで在る「物」であることを強いられた。しかし、物は日常いたるところにあり、誰でもじかに手に触れることができ

る。そういう物から、彫刻は何とかしてみずからを〔あ〕ならなかった。社会が偶然与えた場所に転がっているあれこれの物ではない、言わば物の本質それ自体として〈在る〉ことができるような、そのような存在を彫刻は出現させなくてはならなかった。ある時代が鋭く排除し遺棄したもののなかにこそ、その時代の先端がある。リルケの言い方を借りれば、この時「彫刻は千里眼の視力のように、孤独に、不思議に、時代から抜きん出た」。

指で触れえぬものの神秘が絵画にはある、とボードレーは言ったが、その同じ神秘がまさに彫刻にこそ与えられなくてはならない。与えられれば、それは白日のもとで示される「物」の神秘そのものとなるだろう。物是在る、が、その本質に手を触れることは、誰にもできない。物によって物の本質それ自体の自律した〈表現〉となること、それは可能か、これが彫刻に課された問いの簡潔な姿にほかならなかった。

ロダンが彫刻の対象とした「物」は、言うまでもなく、まだ人体であった。人類が辿ってきた彫刻の長い歴史が、人体の模造にほとんど終始してきた、という事実は何を意味しているだろうか。人体は、私たちがその内側から知ることのできる唯一の「物」である。私たちは、人体とだけその感覚を共有し、持続の感情を共有することができる。一週間だけ生きる昆虫の時間は、私たちの時間とはまったく異なっている。私たちは、その昆虫の一週間だけの生を何と短いものかと思う。けれども、昆虫はおそらく私たちが知らない膨大な細部を生きて死ぬのであり、その生が昆虫にとっても短かろうと思うのは、⁽²⁾ 私たちの勝手な臆測による。私たちがその内側から知っている生は、人間の生であり、私たちが識っている時間もまた、人間の身体が生きる時間ではない。人類が思う唯一神が、ついに人体の姿しか取りえないのは、そのためである。

したがって、ロダンが人体を扱ったのは、彼が内側から究めることのできる「物」はそれしかないからであった。彼にとつて、「物」の本質はそのまま「自然」の本質であり、物として究めうる自然は、人体を描いてよりほかにはなかった。ある場所を確保し、占有し、「空間の静かな持続と、その偉大な法則性のなかに嵌め込まれる」(リルケ) ような人体に彫刻を生み出す。そうした彫刻は、物そのものであると同時に、物の本質の表現でなく

てはならなかった。ひとつの彫刻が、指で触れえぬものの神秘を獲得することができるのは、それが物の本質の表現であるような物となることよってである。ロダンは、この表現を純粹に視覚的な感覺領域のなかにもたらそうとした。[い]は、視覚が受け取る「表現」としてでなくては成り立ちようがない。彼は、そう考えた。

リルケが紹介する「面」⁽³⁾については、極めて深いものである。面とは、彫刻の細胞であり、光とブロンズとの間で形成される無数の表現的單位のことを言う。彫刻は無数の面の連続で成る。だが、それらは、青銅に属するものでも大氣や光に属するものでもない。そうした質料の間にあつて、いかなる質料にも属さず、彫刻家が為す表現の非物質的な單位となる。彫刻を純粹に視覚的な表現とするものは、こうした單位の嚴密な組成 (composition) にほかならない。「面」は決して指で触れることのできない表現上の單位であり、それは光や大氣の限りない変化のなかで、永遠の人体を顛われさせる。あるいは、この人体はまさに動いているように見える。しかし、その運動は、運動の永遠性そのものの表現となりえている。ロダンの彫刻は、それを見るべき特定の位置も光線も指定したりはしない。それは可能的な視覚の全体に一拳に与えられ、あらゆる視覚の内に成立する不変の表現となる。

ところで、リルケがロダン論のために用意した思考の装置は、ロダンの問題をはるかに超えているように思える。彫刻は、物である。紛れもなく物であるものが、いかにして物の本質の表現となり、指で触れえぬものの神秘を持つことができるか。リルケが創り出した問いの中心はここにある。ボードレーが指摘したように、絵画はその本性において決して物(質料)ではない。絵画は「色」や「線」という絵画記号の組成によつて生じる表現である。彫刻は、いかに人体の模造品であろうとも、それ自身が物であることを免れない。それは、彫刻家の意図と無関係にあらゆる地点から眺められ、撫で回される。そうやって、彫刻は物質そのものの変化を刻々に遂げ、摩滅し、別の姿になつていく。人体の模造品であることは、彫刻のこの弱点をいささかも克服しない。

ロダンが彫刻の弱点を克服したのは、「面」⁽⁴⁾という彫刻の記号的單位を決定することによつてであつた。彫刻が表現する人体は、無数の面の組成によつて成る。表現することは、模造することではない。芸術における「表現」

とは、対象の本質を感覚可能なものに転換することである。この転換は、芸術記号によってでなければ為されえない。

(前田英樹『深さ、記号』による)

(注) 1 ボードレール——フランスの詩人・批評家(一八二二—一八六七)。

2 ロダン——フランスの彫刻家(一八四〇—一九一七)。

3 リルケ——ドイツの詩人・作家(一八七五—一九二六)。

問

(A) 〓 線部(i)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 〓 線部(a)について。次の文の場合、〓 線部はどう読むか。その読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

「彼女は話をぼんやりと聴きながら、ハンカチを弄もよほんでいた。」

(C) 〓 線部(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(D) 〓 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 どの位置、どの角度で視るかが指定され、偶然性を排するという性質が、絵画を芸術たらしめている。

2 無数の位置から視たり、ふとした光線のいたずらでその素晴らしさを発見したりできるといった性質が、絵画を芸術たらしめている。

3 むき出しの物体そのものである彫刻の明瞭さを全く排しているという性質が、絵画を芸術たらしめている。

4 「有史以来の暗黒の中」から抜け出し、精神において最も高みに達した優れた鑑賞者のみが理解できるといった性質が、絵画を芸術たらしめている。

5 作り手がただひとつの視点に固執するので、鑑賞する位置を決定できるといった性質が、絵画を芸術たらし

めている。

(E) 空欄 [あ] にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 律しなくては
- 2 卑下しなくては
- 3 回復しなくては
- 4 画さなくては
- 5 同一視しなくては

(F) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 昆虫の生の時間を十分に認めず、人間の生にのみ意味があると推し量ること。
- 2 昆虫がおそらく膨大な細部を生きて死ぬのだとすれば、それには一週間では足りないと言え、推し量ること。
- 3 昆虫は、おそらく膨大な細部を生きて死ぬので消耗してしまい、短命に終わると推し量ること。
- 4 昆虫について、人間の身体が生きる時間という尺度で、人間とは異なるその生を短いと推し量ること。
- 5 昆虫と人間は異なるため、両者の生の時間も当然異なり、人間は長命で昆虫は短命だと推し量ること。

(G) 空欄 [い] に入る言葉として適当なものを本文中から十一字で抜き出して記せ。(句読点や記号があれば、それも字数に含む)

(H) 線部(3)について。その「面」^{プラン}の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 面とは、彫刻を構成する無数の細胞であり、大気や光の限りない変化を表現する。
- 2 面とは、彫刻の非物質的な表現上の単位であり、その厳密な組成によって彫刻は純粹に視覚的な表現となる。
- 3 面とは、連続することで彫刻を成り立たせる表現の単位であり、運動する人体を不動のものとして表現する。
- 4 面とは、彫刻の記号的単位であり、その無数の組成によって人体の運動を永遠に模造する表現となる。
- 5 面とは、決して指で触れることのできない表現の単位であり、特定の視点から眺められる彫刻の表現をな

す。

(I) 本文において、彫刻の「面」に対応するのは、絵画では何か。本文中から七字以内で抜き出して記せ。(句読点や記号があれば、それも字数に含む)

(J) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ボードレールが批判したのは、建築の装飾物や日常の玩弄品となってしまった彫刻で、視覚対象として弱いために、誰でもじかに手に触れられる彫刻だった。

ロ 人類が想う唯一神が、ついに人体の姿しか取りえないのは、私たちがその内側から知っているのが人体とその生でしかないからである。

ハ ロダンが彫刻の対象とした「物」が人体だったのは、人類が辿ってきた彫刻の長い歴史が、人体の構造にほとんど終始しており、ロダンもその歴史を引き継ぐことを望んだからである。

ニ 彫刻には、それ自身が物であることを免れず、刻々に変化を遂げ、摩耗し、別の姿になっていくという弱点がある。

ホ 芸術における「表現」とは、対象の本質を感覚可能なものに転換することであるため、彫刻では物という側面は無視すべきものとなり、面という記号的単位の組成が重要になる。

二 左の文章は、アメリカ統治下の沖縄を舞台とした小説の一節である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと) なお、本文中にある表現で、今日から見れば不適切と思われるものがあるが、作品が書かれた時代背景および作品価値を考慮して、そのままにしている。

この年、西暦一九五八年は北中城村在の瑞慶覧^{メケラン}体育館横で特別に闘牛大会が催された。午後一時の開始には間があった。正午のサイレンが鳴ったばかりだった。少年は窓ガラスに鼻をつぶして、バスケットをしている二十余人のアメリカ青年を見るのも飽き、窓の下に坐り、ぼんやり前に目をやった。常日頃、金網の外から見、寝ころび、走り回り、ころげ回り、逆立ちしたいと思いつけた芝生は毛布のように暑苦しく、半ずぼんの尻を突きさした。芝生は影をつくらず、大きく豊かにうねり、遠くの金網まで一面に拡がっていた。丘を走る金網の底から巨大な白い入道雲が湧き、固まっていた。部落で鳴いていたさわがしい蟬の声がなかった。きれいに刈り込まれた芝生は一面、陽にきらめき、白っぽい緑だった。尻の痛さがなかなか麻痺しないので少年は麦藁帽子を尻に敷いた。規模が沖繩一の体育館もぼつりとあった。体育館の影が幅一メートルほど落ちていた。かろうじて少年は灼熱の陽に直射されない。むらのないまっ青な中天に、一瞬見上げただけで額も目も痛くなる白光があった。あぶられ、体育館は体表がぼけている。少年が坐っている直線形の影の部分だけが、まっ黒く、視力が平常に通用した。はつきりしている場だった。じわじわ地から、じりじり天から、熱が湧き、落ち、事実、⁽¹⁾無音なのに妙にさわがしい、そんな日だった。

闘牛場は米兵が娯楽にフットボールやサッカーをやる広場に設営されていた。草が蹴られてはがれ、むきだした朱色の土に真新しい丸木の杭を十数本打ち込み、丸い金属ロープを五段回わしてある。観覧席に簡易椅子が五百余个置いてある。十組の闘牛はまだそろっていない。スタジアムから二、三十メートル離れた即製のつなぎ杭木に数頭がくくりつけられている。

⁽²⁾突然、かん高いわめき声が出た。男達が早足で一箇所に寄り、次第に群れ、囲みになった。少年は立ちあがり、

麦藁帽子をかぶり、そのつなぎ杭木附近にかけた。すでに五十余人の人垣ができていた。背が低く太った色黒の中年女が、つま先立って、前の頭と頭の間からのぞいていた。小学一、二年生の五人の子供達がじつと一点を見、妙な音のない笑いをしていた。女の足元に古いアルミニウム製のタライが置かれていた。中に数十本のコーラが浸されていた。少年はコーラを見、子供達を見、何回か、それを繰り返した。汗がにじみでた。つばは舌に小さくすぼむ。中年女と目が合い、目をあわててそらし、人垣をかき分け、少年は中に入った。

やけに鼻の大きい、その鼻さえ見なければ沖繩人とみまがう、南米系らしい小柄な男が、牛の手綱を持っていて沖繩人の男にわめきちらしている。男は少し頭を下げ気味に、一言もなく、窮屈げな牛が首を振ったり、顔を上げたりするのをたくみに綱を引き、しずめている。ころもち、遠巻きにしているロウニヤクの人々は周囲の人と目をあわせたり、うなずいたり、小声で何か言いあつたりしながら、外人を見たり、手綱もちを見たり、牛を見たり、そして黒い外国車を見たりしている。少年はやつと、人々の方言とふんいきで訳がわかった。牛の数メートル後ろにある外国車を見た。助手席の扉がはつきりとへこんでいる。角でひつかいたらしい数十センチの白っぽい線が数条走っている。と、すると、あのへっこみは、牛の頭つきの跡だ。しかし、あの天空に向けて真っすぐ伸び、両端がやや外に開いている短い角は、なぜ二つの穴を扉にあげなかったのか。少年は不思議がった。又、牛を見た。黄白色の大氣ににぶく輝く、空の遠くの何かをめぐしているような角は牛に先天性のもので特に変わりはない。うるおい、黒目がちの目のすぐ上に、大人のこぶし大の瘤を発見した。すると、牛は頭つきではなく、あのリュウキ物をあてたのか。頭がばかでない牛だ。大きな石のような重みがあるはずだ。外国車もむしろ軽傷ですんだ。

外人は、飽きず、変らず、みひらいた目を目立たせて、少年がわけのわからない言葉を何かの実況中継のようにとどめない。暑いのか、おどしをかけるためか、花柄のアロハシャツのボタンをゆつくりと全部はずした。風がないので、上着はだらしく垂れ下がる。下着をつけていない。まばらの胸毛の間に肋骨がうきでている。人々の白い上着、白い帽子は陽の強い白に稜線がぼけ、影の黒、人々の目の黒、牛の黒が、さらに強まっているなか

で、外人のカラフルな上着や赤い胸の色はちぐはぐな異物だ。百人近い人垣は立ちつくしている。身動きもほとんどない。^(b) どうしたんだ、みんな。少年は人々をみまわす。同郷の人がいじめられているんだ。たった一人じゃないか。どうしたんだ。そのうち、手綱もちの男をへい、カマン、へい、カマン、と手招き、きびきびとした兵隊のように、外国軍に寄り、又、何か叫びながら、へつこんだ箇所を強く右こぶしでたたいた。指二本分ほどの小片が三つ四つはげ、落ちた。よくみがいた黒肌から銀色のあばた顔があらわれた。これを見、外人はどうとう我を忘れ、靴で扉を続けざまに蹴つとばした。徐々にあばたはひどくなる。周囲の人々の輪は少しも拡散しない。⁽³⁾ 動揺する様子がない。外国車を傷つけたのは大変な事件だと人々は思っている。しかし、まちがいなく牛がやった事で、牛が悪いと思つている。^(c) 自分には関係ない……。

発砲するんじゃないかと少年は恐れ、大人用の麦藁帽子のつばをつかみあげ、視野をよくした。しかし、大勢いるんだから平気さという気が強い。みたところ、ピストルもみえない。牛の手綱を持つている男をみた。相変わらず、心もちうつむき、外人の足元を見ている目は動かない。手ぬぐいを巻いた頭に陽が直射し、耳のつけ根からびんたに汗が流れている。トガイー牛の、この手綱もちは隣部落の二十歳すぎの青年だ。少年が挨拶がわりに笑つてみせても、無愛相にみつめるだけの、この男を日ごろ少年は嫌っていた。顔をあげ、にらみつけるように、それでいて妙に輝きのない、あの目が今はない。伏し目がちに下を見続け、まばたきもしない。ざまあみろという気がおきたが、すぐ消えた。牛を闘わせている時の青年のあの威勢のよさが嘘のように感じられた。戦意のない牛を何度もじだんだを踏み、ハイ、イヤ、イヤ、イヤ、ヒヤ、ヒヤと悲鳴のようなヤグイをかけ、叱咤し、ぶち、無理矢理闘わすのに、今、自分が闘わないのはどうしたことだ。^(d) どうして、こども変わつてしまふのだ。手綱をとりながら、敵の目を盗み、卑怯にも相手牛の目に砂をかけたか、鼻をなわでぶつたりするという噂のある男が、こどもおとなしくなれるのか。牛は、牛だけが体をもてあまし、じつとしない。普段とかわらぬ平気な顔だ。牛は外人にはやく消えろ、うるさいハエだといわんばかりにしつぽを振つたりする、一人で闘いなれた牛は、どんな時、どんな場でも余裕たつぷりである。かえつて、群をわずらわしがる。外人が闘いをいどむな

問

ら、いつでもうけて立つという牛の内心は、黒い巨体をぶるんぶるんと大きくゆすつているしぐさから察せられる。目は黒く澄み、うるおっている。常勝の者の目。自負と自信にささえられた目。^(e)真の勇者のもつ、やさしい大きな目。そして角。無敵の象徴。この世のいかなる強敵にも絶対の自信でたちむかう、この土色がかつた白い固い角だ。少年は牛を見、漠然とだが、そのように感じた。まわりに大勢、寄り集まっている人が、幼児のようにみえた。⁽⁴⁾劣等で非力にみえた。

(又吉栄喜「カーニバル闘牛大会」による)

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしょ}で記すこと)

(B) 線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 サイレンが鳴った直後の静寂の中に響くバスケットボールの弾む音が耳から離れない。
 - 2 蟬の声は聞こえず静かだが、まばゆい光やまといつく熱気によつて心は落ち着かない。
 - 3 深い静寂を湛えて遠くまで拡がっていく芝生が、灼熱の光にあぶられる様子が痛々しい。
 - 4 周囲の音とともに中天に吸い込まれていく入道雲が、息苦しいほどの威圧感を与える。
 - 5 白い光が一面に降り注ぐ芝生の上で、早く走り回り転び回りたいとじりじりしている。
- (C) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 子供たちにもじりもじり見られて不快に思った中年女が大声で怒った。
 - 2 牛の持ち主をのしる外人に周囲の人たちが抗議の声を上げた。
 - 3 南米系の男が自分の車を傷つけた牛の持ち主を激しく罵倒した。
 - 4 外人の車に闘牛を突進させた男に周囲の人たちが喝采を送った。
 - 5 車に頭突きをくらわせた牛に恐怖を感じた外人が悲鳴を上げた。

(D) 線部(a)～(e)のうち、「少年」が心のうちで発した言葉とは言えないもの一つを選び、記号で答えよ。

(E) 線部(3)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 外人の突発的な怒りは特定の人間にではなく、あくまでも牛に向けられたものだから。
- 2 牛の持ち主は日頃から無愛相で、外人に責められていても同情する気になれないから。
- 3 一人の外人が怒ったところで、周囲の人々は百人以上おり何も怖れる必要はないから。
- 4 外人が怒るのはもつともだが、すべての責任は牛とその飼い主に帰せられるべきだから。
- 5 花柄のアロハシャツをはだけて大げさに怒る外人の姿は滑稽としか感じられないから。

(F) 線部(4)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分たちの不満をはつきり表明する代わりに、牛を使って外人の車を傷つけるような真似をするから。
- 2 大人が大勢いるにもかかわらず、普段の威勢のよさが嘘のように無言で外人の怒りに耐えているから。
- 3 どんな状況でも余裕をもち闘志にあふれる牛を、親にすぎる子のように人々が取り囲んでいるから。
- 4 一頭でも自信に満ちた牛と対照的に、大勢の大人が一人の外人相手に何も言い返せず黙っているから。
- 5 外人が怒っていることはわかっていても、言葉が理解できず困惑するばかりで何も言い返せないから。

(G) 次の各項について、本文における表現上の特徴と効果として適当なものを1、適当でないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 色を示す言葉が多用され、とりわけ白と赤の対照が物語世界にみなぎる不穏な暴力性を象徴している。
- ロ 視覚に関わる表現が効果的に用いられることで、外人と周囲の人々との不均衡な力関係が暗示されている。
- ハ 要所に英語と方言の表現が差しはさまれることで、物語全体に独特な異国情緒がかもし出されている。
- ニ 少年の内面の声がたびたび描出され、物語世界が少年の目を通して語られていることが明示されている。
- ホ 外人に対する周囲の人々と牛の態度が対照的に描かれることで、少年の怒りと無力感が強調されている。

三 左の文章は『源氏物語』の一節で、薫が八の宮を宇治に訪ねたが、不在であったため、その娘たちを垣間見る場面を描いたものである。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、⁽¹⁾ 簾を短くまきあげて、人々あたり。簀子に、いと寒げに、身細くなえはめる童一人、同じさまなる大人などあり。内なる人、一人は柱にすこし隠れて、琵琶の前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝゐるに、雲隠れたり。つる月のはかに、いと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげに、にほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。「およばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと、憎く推し量らるるを、げにあはれなるもの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。⁽⁷⁾

霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また、月さし出でなむと思すほどに、奥の方より、「人おはす」と告げきこゆる人やあらむ、簾おろして、みな入りぬ。おどろき顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよやかに心苦しうて、いみじうあてにみやびかなるを、あはれと思ひたまふ。⁽⁹⁾

やをら立ち出でて、京に、御車率て参るべく、人走らせつ。ありつる侍に、「をりあしく参りはべりにけれど、なかなかうれしく、思ふことすこし慰めてなむ。かくさぶらふよし、聞こえよ。いたう濡れにたるかごとも聞こえさせむかし」とのたまへば、参りて聞こゆ。⁽¹¹⁾

(注) 1 簀子——廊の外に、雨露がたまらないように細い板を少しすきまをあけて横に並べた縁。

2 一人——八の宮の娘で、妹の中の君のこと。

3 添ひ臥したる人——八の宮の娘で、姉の大君のこと。

4 これも月に離るるものは——琵琶の胴の表板下方にある楕円形の穴を「隠月」と称し、普通ここに撥を納めることを踏ませる。
て言う。

問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 田舎じみている 2 疲れたようすである 3 こざっぱりとした

4 痩せ衰えた 5 着古した衣服を着た

(B) ——線部(2)について、「これ」とは何を指すか、その語を文中から抜き出して答えよ。

(C) ——線部(3)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気品がある 2 愛らしい 3 整っている

4 つややかである 5 もの静かである

(D) ——線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気分が晴れず物思いに沈みがちで 2 年をとるに従って慎重になって

3 中の君よりも落ち着いた感じで 4 以前よりもさらに思慮深くなって

5 身分に応じた雰囲気が出てきて

(E) ——線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 いかにも冷淡で無関心であった時とまったく違って

- 2 そばを離れて気遣いをしていた時とまったく違って
- 3 直接に会わずに想像していたのとはまったく違って
- 4 他人事のように考えていたのとはまったく違って
- 5 都から思いを寄せていたのとはまったく違って

(F) 線部(6)について。「なつかしう」とはどのようなようすか。最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 物語の中で聞いたことがあると感じられるようす
- 2 姉妹の会話に幼い頃が思い返されるようす
- 3 琵琶や琴などの音色が魅力的に感じられるようす
- 4 物語を読む若い女房のことが思い出されるようす
- 5 風情のある姉妹に親しみが感じられるようす

(G) 線部(7)の解釈として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 なるほど悲しみに満ちた出来事が現実にある世の中だったのだ
- 2 なるほど人目につかない所に趣深いことがありえる世の中だったのだ
- 3 なるほど普通の生活では物事の奥深さが感じとれない世の中だったのだ
- 4 なるほど気の毒な境遇にある人々にとって生きにくい世の中だったのだ
- 5 なるほど魅力的なことは秘密にしておくほうがよい世の中だったのだ

(H) 線部(8)の解釈として最も適當なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 風情をいっそう理解できるようになったに違いない
- 2 物語ではなく現実のほうに眞実を見いだしたに違いない
- 3 それまでのかたくなな考え方を悔い改めたに違いない

4 田舎に対する考えを大きく改めたに違いない

5 姫君たちに心を奪われてしまったに違いない

(I) 線部(9)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 やつと
- 2 さりげなく
- 3 静かに
- 4 急に
- 5 ちよつと

(J) 線部(10)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(K) 線部(11)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 かえつて
- 2 本当に
- 3 ずいぶん
- 4 ほんの少し
- 5 次第に

(L) 線部(イ)・(ロ)の文法上の説明として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 「な」は完了の助動詞、「む」は推量の助動詞

2 「な」は打消の助動詞、「む」は推量の助動詞

3 「な」は動詞語尾、「む」は推量の助動詞

4 「なむ」は係助詞

5 「なむ」は終助詞